

青年期男女の身体満足度とその関連要因

佐藤 公代

(教育心理学教室)

寺川 夫央

(平成9年9月30日受理)

Body Satisfaction within Adolescence and Correlated Factors

Kimiyo SATO and Fuo TERAGAWA

問題と目的

青年期は、男女ともに自己の身体を受容が大きな課題となる時期である。青年前期、すなわち、第二次性徴に始まる思春期には、性的な成熟に向かい、その身体は著しい変化を遂げる。変化しつつある、あるいは、変化した身体を基に、青年期の男女は、子どもの身体像から大人としての身体像を再構築していくのである。この時期、改変された身体をいかに意識し、どのように受容していくかが、自己像や性同一性にも影響していく。

身体を受容を規定するものとして、まず、考えられるのは、身体についての満足感である。身体への満足度を測定するものとしては、主として、Secord & Jourard (1953) による Body Cathexis Scale をもとにした尺度が用いられてきた。この尺度は、身体全体および各部に対する満足度を評定させるものである。これまでの研究において、身体満足度には男女差がみられ、全般的にみて、青年期の女子は男子より満足度が低いことが指摘されてきた(柴田, 1987; 齊藤, 1993)。

身体満足度については、さまざまな要因との関連が検討されている。その中で、佐藤・寺川(1995)は、青年後期の女子では、身体満足度が低いほど、自己の身体をより太っていると思い、痩せたいと強く願っていること、自己について、自信がなく、無能だと評価しがちであることを示した。また、青年後期の男女を対象にした佐藤ら(1996)は、身体満足度と性別役割意識との関連を検討している。その結果、身体への不満度が高い者は、男子なら男性性、女子なら女性性の現実と理想のずれが大きくなっていることを示し、男女ともに、自己の性における性別役割の理想をどの程度具現しているかという意識が、自己の身体に対する満足度に関わっていることを示唆した。

一方、山口(1989)は、SD法を用いて、青年後期を対象にして探索的に身体イメージの測定を試みている。このSD法による身体イメージの研究としては、高里(1994)による青年期女子を対象に性の受容との関連を検討したものがあつた。その研究の結果、肯定的な身体イメージをもつことが、生来の性の受容感を高める要因になることがわかつた。また、青年後期を対象とした佐藤ら(1997a)の研究では、男女それぞれにおいて、性の受容のあり方の違いにより、身体イメージが異なつてゐることが明らかにされた。

このように、青年期の身体像については、身体満足度、SD法による身体イメージなどの尺度を用いて、性役割意識、性の受容などとの関連が研究されてきた。しかし、それらの対象は、主として青年後期にあてられたものが多く、青年前期および中期を対象とした研究は少ない。また、身体、性の受容、性役割意識といった研究は、特に女子にスポットが向けられることが多く、男子におけるそれらの研究はなおざりにされてゐる。

そこで、本研究では、青年前期、中期、後期の男女を対象に、身体を受容を規定すると考えられる、身体満足感と諸要因の関連を検討することを目的とする。身体への満足感、すなわち、身体満足度と関わる要因としては、これまでの研究において関連が示唆されてきた、身体への関心、性別役割意識の現実と理想の差、性の受容、実際の体格、そして、SD法による身体イメージをとりあげる。具体的には、中学生、高校生、大学生にアンケート調査を行い、その結果を学校および男女別に分析し、身体満足度と諸要因の関連について考察を試みる。

方 法

調査対象者 E県内にある公立中学校、国立大学附属中学校および公立高等学校の生徒、国立大学、私立大学の学生。中学生：男子310人、女子301人、計611人(平均年齢 13.37 ± 0.97 歳)、高校生：男子104人、女子113人、計217人(平均年齢 16.04 ± 0.90 歳)、大学生：男子128人、女子110人、計238人(平均年齢 19.58 ± 1.33 歳)、総計1066人。

調査時期 1995年7月中旬。

調査方法 質問紙によるアンケート調査。中学校、高等学校においては、各学校の教官に調査を依頼した。大学においては、各大学の授業を担当している教官に調査の協力を依頼し、授業時間内に実施した。大学での所要時間は、説明時間を含めて30分程度であつた。

質問紙 調査の内容および形式の概要を以下に示す。

1. 身体満足度：Secord & Jourard(1953)によるBody Cathexis Scaleをもとに、身体部位・属性・サイズをあらわす項目を選んだ。それは、頭、顔全体、目、鼻、口、耳、歯、あご、首、肩、胸、背中、胴、腰、腹、おしり、腕、手、ふともも、ふくらはぎ、足、足首、髪の色、体毛、肌の色、皮膚、身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップ、プロポーションの32項目である。各項目について、「今の自分の身体にどのくらい満足しているか」を「たいへん満足している」から「たいへん不満である」までの7段階評定にて回答を求めた。

2. 身体関心度：身体満足度と同一の32項目について、「今の自分の身体にどのくらい関心があるか」を「たいへん関心がある」から「まったく無関心である」までの7段階評定にて回答を求めた。

3. SD法による自己の身体イメージ：山口(1989)の研究を参考にし、SD法の形容

詞対24項目を選んだ (Table 1 参照)。項目の選定にあたっては、中学生にも理解可能な表現であること、山口 (1989) の研究において性差のみられた項目を盛り込むことを観点とした。各項目について、「今の自分の身体をどのようにイメージしたり、感じたりしているか」を7段階評定にて回答を求めた。

4. 性の受容：現在の自分の性に生まれて良かったと思うかどうかを「とても良かったと思う」から「ぜんぜん良かったとは思わない」までの7段階評定にて回答を求めた。

5. 性役割意識：伊藤 (1978)、山口 (1985) の研究を参考に、男らしさ (男性性) をあらかず言葉として、行動力のある、たくましい、筋肉質の、冒険心にとんだ、勇敢な、闘争的な、の6項目、女らしさ (女性性) をあらかず言葉として、細やかな、おしゃれな、よく気をつく、かわいい、色気のある、声が高い、の6項目を選んだ。各項目について、「今の自分にどれくらいあてはまるか」(現実の男性性・女性性)、「なりたい大人にどれくらいあてはまるか」(理想の男性性・女性性)を「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの7段階評定にて回答を求めた。

6. 自己の身体サイズ：自己の実際の身長および体重を具体的数値にて回答を求めた。

結 果

各尺度の検討

身体満足度については、7段階評定の回答に対して、満足度の高い方から順に7点から1点を与えた。32項目の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .943$ と内的整合性が高いことがわかった。身体関心度についても満足度と同様に、関心度の高い方から順に7点から1点を与え、 α 係数を求めたところ、 $\alpha = .955$ と高い数値が示された。そこで、身体満足度および関心度については、32項目の平均値をそれらの尺度として用いることにした。

SD 法による自己の身体イメージについては、尺度を下位分類するために、24項目について主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、項目のまとまりがよく、各因子の解釈が可能な3因子解を採択した (Table 1 参照)。第1因子は「評価」の因子 ($\alpha = .864$)、第2因子は「重さ」の因子 ($\alpha = .691$)、第3因子は「強さ」の因子 ($\alpha = .741$) と解釈し、この3因子を下位尺度として用いることにした。

性の受容度については、7段階評定の回答に対し、受容しているほど得点が高くなるように7点から1点を与えた。

性役割意識については、7段階評定の回答に対し、あてはまる方から順に7点から1点を与えた。そして、男性性、女性性についてそれぞれ、6項目の理想値から現実値を差し引き、合計したものを項目数で除した値を求めた。これらの値は、男性性、女性性それぞれの理想と現実のギャップを示すものと考え、値が高くなるほどギャップが大きいと解釈する (以下、「男性性の理想-現実」「女性性の理想-現実」とする)。「男性性の理想-現実」は $\alpha = .656$ 、「女性性の理想-現実」は $\alpha = .630$ と一定の内的整合性があると考えられたので、これらを尺度として用いることにした。

実際の体格については、身長と体重の報告値から体格指数として BMI (Body Mass Index) を求めた。その算出式は、体重 (kg) / 身長 (m)²である。この BMI 指数を体格の指

Table 1 自己の身体イメージ24項目の因子分析結果
(主因子法, バリマックス回転)

項目	第1因子 (評価)	第2因子 (重さ)	第3因子 (強さ)	
17	悪い-良い	.651	.000	-.076
9	絶望的-希望的	.614	-.156	-.093
22	好きな-嫌いな	-.594	.208	.068
19	頼りにならない-頼りになる	.584	-.018	-.318
24	ばらばらの-まとまった	.569	.027	-.059
6	うれしい-かなしい	-.555	.231	.130
5	安心した-不安な	-.518	.043	.185
20	受け入れられた-拒否された	-.512	.026	.177
12	美しい-みにくい	-.499	.305	.037
16	暗い-明るい	.490	.026	-.178
15	満ちた-空っぽの	-.479	-.162	.201
11	役立つ-役立たない	-.473	.103	.375
2	劣っている-優れている	.456	-.214	-.266
21	未熟な-成熟した	.403	.015	-.087
13	不潔な-清潔な	.385	.056	-.090
4	曲がった-まっすぐな	.365	-.045	-.034
3	太った-やせた	.139	-.778	.145
23	軽い-重い	-.090	.695	-.123
8	角張った-丸みのある	.056	.566	.058
14	厚い-薄い	-.025	-.519	.386
18	鋭い-鈍い	-.123	.237	.226
1	強い-弱い	-.175	-.071	.766
10	力のある-力のない	-.180	-.127	.689
7	もろい-じょうぶな	.298	.156	-.497
	固有値	5.95	2.90	1.47
	寄与率(%)	24.8	12.1	6.1
	累積寄与率(%)	24.8	36.9	43.0

標として用いた。

1. 各尺度の男女差及び学校差の検討

各尺度の学校および男女別の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。また、性（男子、女子）×学校（中学、高校、大学）の2要因の分散分析の結果を併せて Table 2 に示した。

まず、身体満足度については、分散分析の結果、性の主効果が有意であり、女子は男子よりも満足度が低いことがわかった。また、身体関心度においても、性の主効果が有意であり、女子は男子よりも身体への関心が高いことが示された。満足度および関心度については、学校の主効果および交互作用は有意ではなく、青年期を通じて、性差のみがみられた。

SD法による自己の身体イメージにおいて、「評価」の因子では、性の主効果および学校の主効果が有意であった。最小有意差検定による下位検定の結果、男子は女子よりも、中学生は高校生よりも自己の身体について肯定的な評価をしていることが示された。「重さ」の因子で

青年期男女の身体満足度とその関連要因

Table 2 各変数の男女別・学種別の平均, 標準偏差および分散分析の結果

	学校	男子	女子	分散分析結果		
		Mean(N) (SD)	Mean(N) (SD)	性 下位	学校 検定	交互作用 (最小有意差検定)
身体満足度	中学	3.99(309) (0.38)	3.50(301) (0.91)	76.88*** 男>女	n.s.	n.s.
	高校	3.96(104) (0.74)	3.43(113) (0.57)			
	大学	3.87(128) (0.78)	3.45(110) (0.68)			
身体関心度	中学	4.05(309) (1.06)	4.58(301) (0.92)	108.14*** 女>男	n.s.	n.s.
	高校	3.97(104) (1.00)	4.72(113) (0.57)			
	大学	4.06(128) (0.94)	4.73(110) (0.62)			
「評価」の因子	中学	4.31(310) (0.64)	4.15(301) (0.60)	8.55** 男>女	4.15* 中>高	n.s.
	高校	4.11(104) (0.67)	4.08(113) (0.50)			
	大学	4.19(128) (0.78)	4.10(109) (0.59)			
「重さ」の因子	中学	3.93(310) (0.80)	4.44(301) (0.78)	101.32*** 女>男	n.s.	n.s.
	高校	4.00(104) (0.78)	4.51(113) (0.77)			
	大学	4.06(128) (1.02)	4.58(110) (0.86)			
「強さ」の因子	中学	4.40(310) (1.13)	4.34(301) (1.00)	n.s.	n.s.	n.s.
	高校	4.27(104) (1.21)	4.44(113) (0.92)			
	大学	4.21(128) (1.27)	4.16(110) (1.03)			
性の受容度	中学	5.80(310) (1.33)	4.93(301) (1.62)	104.06*** 男>女	n.s.	n.s.
	高校	5.85(104) (1.23)	5.01(113) (1.32)			
	大学	5.87(128) (1.11)	4.98(109) (1.33)			
男性性の 理想-現実	中学	1.00(251) (0.87)	0.47(217) (0.93)	73.34*** 男>女	12.04*** 大>高・中	n.s.
	高校	1.09(100) (0.91)	0.62(101) (0.89)			
	大学	1.37(126) (1.04)	0.82(105) (0.82)			
女性性の 理想-現実	中学	0.45(213) (0.80)	1.44(238) (1.01)	180.75*** 女>男	n.s.	4.82** 男: n.s. 女: 中>高
	高校	0.62(89) (0.88)	1.16(106) (0.85)			
	大学	0.60(127) (0.93)	1.31(105) (0.81)			
BMI 指数	中学	19.07(282) (2.58)	19.00(232) (2.26)	10.62*** 男>女	77.24*** 大>高>中	6.77** 男: 大>高>中 女: 大・高>中
	高校	20.84(101) (2.32)	20.27(85) (1.98)			
	大学	21.91(128) (2.90)	20.45(106) (1.86)			

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

は、性の主効果のみが有意であり、女子は男子よりも、自己の身体を太っていて、重量感のあるものとイメージしていることがわかった。「強さ」の因子では、いずれの主効果も交互作用も有意ではなかった。

性の受容度については、性の主効果のみ有意であり、男子は女子よりも自己の性に生まれたことを肯定的に受けとめていることがわかった。

「男性性の理想-現実」では、性および学校の主効果がいずれも有意であった。最小有意差検定の結果、男子は女子よりも、大学生は中学生、高校生よりも男性性の理想と現実のギャップが大きいことが示された。「女性性の理想-現実」では、性の主効果が有意であり、女子は男子よりも女性性の理想と現実のギャップが大きいことがわかった。また、交互作用も有意であった。そこで、男女別に学校（中学・高校・大学）を要因とする分散分析を行った結果、男子では学校による有意な差はみられなかった。一方、女子では、中学生は高校生よりも女性性の理想と現実のギャップが大きいことがわかった。

BMI 指数では、性および学校の主効果が有意であり、また、交互作用も有意であった。最小有意差検定による下位検定の結果、男子は女子より、大学生は中学生、高校生より、高校生は中学生よりも BMI 指数が大きくなっていることがわかった。また、男女別に学校差を検討したところ、男子では、学校段階が上がるにつれて BMI 指数が大きくなっているが、女子では、高校生と大学生の間には差がみられなかった。

2. 各尺度間の相関係数

身体満足度、身体関心度、SD 法による自己の身体イメージの 3 因子、性の受容度、「男性性の理想-現実」、「女性性の理想-現実」、BMI 指数の 9 つの変数について、性および学校別に各変数間のピアソンの相関係数を求めた。その結果を Table 3-1~3 に示した。

ここでは、身体満足度と有意な相関を示す変数について学校および男女別に検討する。まず、

Table 3-1 中学生における各変数間の相関係数（右上部：男子，左下部：女子）

	身体満足度	身体関心度	評価の因子	重さの因子	強さの因子	性の受容度	男性性の理想-現実	女性性の理想-現実	BMI 指数
身体満足度		.235**	.471***	-.148*	.280***	.022	-.219**	-.132	-.195**
身体関心度	-.224**		.161*	-.129	.044	.044	.022	-.107	-.094
評価の因子	.530***	-.067		-.077	.485***	.084	-.337***	-.160*	-.139
重さの因子	-.410***	.203*	-.179*		.373***	-.021	-.079	.140	.682***
強さの因子	.012	.109	.252**	.236**		.108	-.350**	.025	.268***
性の受容度	.100	.130	.123	-.115	-.014		.006	.076	.002
男性性の理想-現実	-.111	.180*	-.157	.007	-.228**	-.004		.295***	.032
女性性の理想-現実	-.339***	.115	-.242**	.077	-.094	-.055	.215*		.195**
BMI 指数	-.241**	.162	-.034	.613***	.239**	-.100	-.041	-.025	

男子：n=183 女子：n=143

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

青年期男女の身体満足度とその関連要因

Table 3-2 高校生における各変数間の相関係数 (右上部：男子, 左下部：女子)

	身体満足度	身体関心度	評価の因子	重さの因子	強さの因子	性の受容度	男性性の理想-現実	女性性の理想-現実	BMI指数
身体満足度		.010	.583***	.024	.216*	.212	-.289**	-.184	-.048
身体関心度	-.534***		.095	.156	.169	.038	-.178	.228*	.098
評価の因子	.295*	.070		.164	.421***	.281*	-.252*	-.110	.134
重さの因子	-.345**	.088	.002		.432***	-.111	-.198	.105	.741***
強さの因子	-.073	.080	.185	.460***		.183	-.429***	-.077	.399***
性の受容度	.119	.227	.229	-.034	.103		-.091	.027	-.052
男性性の理想-現実	-.195	.337**	-.138	.025	-.150	-.245		.338**	-.191
女性性の理想-現実	-.219	.241*	-.105	.196	.269*	-.279*	.294*		.120
BMI指数	-.166	.052	.026	.735***	.403***	-.019	-.025	-.013	

男子：n=84 女子：n=74

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

Table 3-3 大学生における各変数間の相関係数 (右上部：男子, 左下部：女子)

	身体満足度	身体関心度	評価の因子	重さの因子	強さの因子	性の受容度	男性性の理想-現実	女性性の理想-現実	BMI指数
身体満足度		-.184*	.624***	-.206*	.478***	.194*	-.247**	-.303**	-.175
身体関心度	-.277**		.022	.013	-.008	.091	.028	.032	.098
評価の因子	.479***	-.074		-.008	.641***	.271**	-.348***	-.358***	.046
重さの因子	-.500***	.176	-.213*		.298**	.0661	-.049	.164	.804***
強さの因子	-.167	.009	.247*	.243*		.208*	-.429***	-.137	.328***
性の受容度	.265**	.061	.258*	-.028	-.110		.027	.024	.136
男性性の理想-現実	.073	.082	-.191	-.067	-.351***	.036		.381***	-.163
女性性の理想-現実	-.236*	.226**	-.341**	.021	-.063	-.053	.074		.129
BMI指数	-.396***	.199	-.160	.725***	.203*	-.006	.063	-.041	

男子：n=125 女子：n=95

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

中学生男子において、身体満足度は、身体関心度、「評価」の因子、「強さ」の因子の3つの変数と有意な正の相関を示し、「重さ」の因子、「男性性の理想-現実」、BMI指数の3つの変数と有意な負の相関を示した。中学生女子では、身体満足度と有意な正の相関がみられた変数は、「評価」の因子のみであったが、身体関心度、「重さ」の因子、「女性性の理想-現実」、BMI指数の4つの変数とは有意な負の相関を示した。

高校生男子では、身体満足度は「評価」の因子、「強さ」の因子の2つの変数と有意な正の相関を示し、「男性性の理想-現実」とは有意な負の相関を示した。また、高校生女子において、身体満足度が有意な正の相関を示したのは、「評価」の因子のみであり、負の相関を示し

たのは、身体関心度、「重さ」の因子の2つの変数であった。

大学生男子では、BMI 指数以外の7つの変数が身体満足度と有意な相関を示した。そのうち、「評価」の因子、「強さ」の因子、性の受容度の3つの変数は、正の相関であり、身体関心度、「重さ」の因子、「男性性の理想-現実」、「女性性の理想-現実」の4つの変数は負の相関であった。大学生女子では、身体満足度と有意な相関を示す変数は6つであり、「評価」の因子、性の受容度では正の相関を示し、身体関心度、「重さ」の因子、「女性性の理想-現実」、BMI 指数では負の相関を示した。

3. 身体満足度を従属変数とする重回帰分析の結果

身体満足度を従属変数とし、身体関心度、SD 法による身体イメージの3因子、性の受容度、「男性性の理想-現実」、「女性性の理想-現実」、BMI 指数を独立変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を学校および男女別に行った。その結果を Table 4 に示した。

学校、男女ともに共通して、身体満足度と有意な正の関連を示した独立変数は、SD 法による自己の身体イメージにおける「評価」の因子であった。また、学校を問わず女子においては、「重さ」の因子が身体満足度と有意な負の関連を示す独立変数として選択された。

学校および男女別にみると、まず、中学生では、「評価」の因子の他に、男子では、身体関心度が身体満足度と有意な正の関連を示す独立変数として採択され、女子では、「重さ」の因子と「女性性のギャップ」の2つの独立変数において、身体満足度との有意な負の関連がみられた。次に、高校生では、男子においては、「評価」の因子以外の独立変数は採択されなかったが、女子では、身体関心度と「重さ」の因子の2つの独立変数において身体満足度と有意な負の関連がみられた。大学生では、男子において、身体満足度は「評価」の因子と「強さ」の

Table 4 身体満足度を従属変数とする重回帰分析の結果

	中 学 生		高 校 生		大 学 生	
	男 子 (n=183)	女 子 (n=143)	男 子 (n=84)	女 子 (n=74)	男 子 (n=125)	女 子 (n=95)
身体関心度	.16*	—	—	-.53***	-.17*	-.18*
評価の因子	.44***	.42***	.58***	.33***	.47***	.44***
重さの因子	—	-.32***	—	-.30***	—	-.33***
強さの因子	—	—	—	—	.26**	-.20*
性の受容度	—	—	—	—	—	—
男性性の理想-現実	—	—	—	—	—	—
女性性の理想-現実	—	-.21**	—	—	—	—
BMI 指数	—	—	—	—	-.27***	—
R ²	.248	.426	.340	.485	.496	.459
F	29.62***	34.37***	42.24***	21.99***	29.53***	19.13***
df	2,180	3,139	1,82	3,70	4,120	4,90

注. 重回帰分析はステップワイズ法による。

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

因子の2つの独立変数と有意な正の関連を示し、身体関心度、BMI指数とは有意な負の関連を示すことがわかった。一方、大学生女子では、身体満足度と有意な正の関連が示されたのは「評価」の因子のみであり、身体関心度、「重さ」の因子、「強さ」の因子の3つの独立変数とは有意な負の関連がみられた。

考 察

1. 身体満足度と関連要因における男女差および学校差について

身体に対する満足度、身体への関心度は、従来の研究結果と同様に、本研究においても男女差がみられた。中学生から大学生にかけ、一貫して女子は男子よりも身体への不満感が強く、関心度が高いことが示された。また、青年期では男子の方が女子よりも、自己の身体について肯定的な評価をし、軽くやせたイメージをもっていることがわかった。山口(1989)は、SD法による身体イメージの研究において「女子は男子に比べると自分の身体を良くないものであり、秩序感に欠け、俊敏性がなく、重くて太ったものと感じている」と考察しているが、本研究でも同様のことが指摘できる。

性の受容については、女子よりも男子の方が自己の性に生まれたことを肯定的に受けとめていた。これは、思春期の身体変化が、男子よりも女子において否定的に受け止められがちであるという身体的側面(斉藤, 1987; 日野林, 1994)、現代においても男女平等とは言い難い社会的、文化的側面を反映したものと考えられる。

男性性および女性性の現実と理想のギャップについては、男女それぞれ、自己の性の特性においてギャップが大きくなっていった。すなわち、男子では男性性の理想と現実のギャップが女子よりも大きく、女子では女性性の理想と現実のギャップが男子よりも大きくなっていったのである。青年期においては、自己の性に則した特性を身につけることが、男女ともに課題となっていることが窺える。また、男性性の理想と現実のギャップは、中学生、高校生より大学生の方が大きくなっていった。大学生は、より成人に近い段階にあり、社会人として必要とされる特性と男性性が重なることから、男女ともに理想と現実の差を意識しているのではないだろうか。

BMI指数をみると、男子では、中学生より高校生の方が、中学生、高校生より大学生の方が体格が大きくなっており、女子では、中学生より高校生、大学生の方が体格が大きくなっていった。これらの結果は、一般に、中学生が思春期における著しい身体変化の途上にあること、第二次性徴に伴う身体変化は女子の方が男子より早く始まること、身長、体重の増加などにみられる量的な変化は男子の方が大きいことなど、青年期の身体発達の特徴を考慮すれば、妥当な結果であると考えられる。

2. 身体の満足感と諸要因の関連性について

本論では、身体を受容感を示すものとして身体満足度を取りあげ、身体関心度、身体への評価・重量感・力強さのイメージ、自己の性の受容度、男性性および女性性の理想と現実のギャップ、実際の体格指数との関連を検討した。各尺度間の相関および重回帰分析の結果、青年期における身体の満足感に関わる諸要因の影響力は、男女および年齢段階において異なることが

示唆された。

まず、青年期の男女に共通して示された結果は、身体への評価的なイメージが、身体満足度を高める要因となることである。自己の身体について肯定的に評価することが身体への満足感につながることは、容易に理解しうる結果であろう。また、女子では、青年期を通して、自己の身体を重く、太っているといったイメージをすることが、身体への不満感を高める要因となっていた。現代社会において、痩せた身体がもてはやされる傾向が、青年期女子の身体への満足感にも大きく影響していることが本研究でも指摘できる。これまでの研究においては、多くの女子学生が、客観的には太っていないくても、自己の体型を太っていると認知していること（佐藤・寺川，1995）、中学生では、女子においてのみ、客観的な指標に関わらず、痩せていれば痩せているほど満足であるとする傾向があること（佐藤ら，1997b）を示唆した。これらを考え合わせれば、青年期女子における、盲目的な痩せへの願望から自己の身体を太ったものとイメージし、それが身体への不満を高めている、といった姿が浮かび上がる。このことは、現代社会の中で若い女性に急増している摂食障害、過度のダイエットが要因とされる無月経症や骨密度の低下などの健康障害とも無関係ではなく、青年期女子の身体イメージがこれらの温床となっていることが推測される。

これまでの青年期を対象とした研究では、身体関心度と身体満足度には、負の相関があることが示唆されてきた（斉藤，1993）。すなわち、身体に対する関心が高いほど、身体への不満が高くなるという関係が指摘されてきたのである。本研究においては、身体満足度と身体関心度の間で、男女で異なる年齢的变化を示した。男子では、身体への満足度に及ぼす関心度の影響は、中学生においては正の関連を示し、身体への関心が高いほど満足感が高くなっているが、高校生では両者の関連はみられなくなる。そして、大学生になると中学生とは逆に、負の関連を示し、身体への関心の高さは、身体の不満感につながっているのである。一方女子では、学校を問わず、身体満足度と関心度の間には負の相関がみられ、高校生と大学生では、身体への関心の高さが身体への不満感に影響していた。これらの結果から、男子において、身体への関心のあり方が、高校を境にネガティブに変化することが示唆される。佐藤ら（1997b）の中学生男女を対象にした分析結果では、女子において中学2年生頃から身体満足度と身体関心度の負の相関が示されたが、女子におけるこのような変化が男子ではやや遅れてみられると考えられよう。いずれにせよ、思春期の身体変化に伴い、男女ともに身体への関心は身体への不満感と関連するといえる。ただし、その時期は女子の方が早く、また、その傾向は女子において顕著に示されると考えられよう。

男女において、身体への満足度に逆の影響力がある要因としてあげられるのは、自己の身体への力強さのイメージである。ただし、大学生においてのみ、その影響がみられる。すなわち、大学生男子では、自己の身体について力強いイメージをもつことが身体への満足度を高めるのに対し、大学生女子では、力のない、弱いイメージをもつことが身体への満足度を高めているのである。なお、男子では、中学生、高校生においても、身体満足度と身体への力強さのイメージは正の相関が示されており、身体を力強くイメージしているほど身体への満足度が高くなるという関係にある。さらに、男子では、身体に強さをイメージすることと男性性の理想と現実のギャップの大きさに負の相関がある。力のある、強い、じょうぶなといった言葉は、旧来の男性性に通ずる特性であるため、青年期の男子にとって、それらのイメージを自己の身体にもっていることが、理想の男性像の実現度や身体への満足感と関連しているであろう。そして、

身体変化が落ち着いた段階である大学生男子では、身体の強さのイメージが、自己の身体を受容感にも一定の影響をもつものになると考えられる。一方、大学生の女子においては、男子とは逆に、力強さを自己の身体にイメージすることが、身体への不満感を高めている。「強さ」の因子と「重さ」の因子が正の相関を示すことから窺えるように、痩せた、スリムな身体がもてはやされる現代において、女性的イメージとも重なる華奢で脆弱な身体イメージをもつことが、青年後期の女子にとって、身体を受容感につながっているのであろう。

男子においては、青年期を通して、男性性の理想と現実のギャップが小さいほど、身体への満足感が高くなっていることが示された。女子では、中学生と大学生において、女性性の理想と現実のギャップが小さいほど身体への満足感が高くなっていた。この結果は、大学生の身体満足度と性別役割意識との関連を分析した研究結果（佐藤ら、1996）と符合する。また、中学生女子では、女性性の理想と現実のギャップの大きさが身体への不満感に影響していた。これらの結果から、青年期では、自己の性特性の理想をどれだけ実現しているかが、身体への満足感とも関わっており、特に青年前期の女子にとってはその傾向が強いことが窺える。

大学生では、男女ともに自己の性の受容度が高いほど身体への満足度が高くなっていた。しかし、中学生、高校生では、このような相関はみられなかった。このことから、性の受容と身体への受容が多少なりとも関連するのは、男女とも青年後期頃であると考えられる。性の受容度では、学校差はみられず、男女差のみみられたが、その意味内容は、青年期を通して変化するものであろう。自己の性の受容は、青年後期になるほど、身体への受容感との関連が深くなるということが窺える。

大学生男子では、実際の体格が小さいことが身体への満足感に関連していた。また、中学生男女、大学生女子においては、実際の体格が小さいほど身体への満足度が高くなる関係にあった。この体格指標として用いた BMI 指数は、瘦一肥の判定にも用いられることを考慮すれば、女子において身体への満足感に直接的な影響を与えると推測されるが、重回帰分析では要因として採択されなかった。青年期の男女にとっては、実際の体格より、身体のもつイメージや関心度が身体への受容度の決め手になると考えられる。

以上、本論では、青年期にある中学生、高校生、大学生の男女を対象に、主として身体への満足感はどのような要因と関連するのかを検討してきた。その結果、青年期を通して男女ともに身体への肯定的な評価が身体への満足度を高めること、青年期の女子では、身体について太った、重いイメージが身体への不満感を強めていること、青年後期において、男子では身体の力強さのイメージが身体満足度を高めるのに対し、女子では不満感を高めること、身体への関心の高さが、身体についての不満感を高める要因となる時期は、男子の方が女子より遅いこと、などがわかった。これらのことから、身体への満足感と関わる要因は、思春期の身体変化が著しい時期から青年後期に至る過程において変化し、その内容や変化の時期が男女によって異なることが示唆された。

文 献

- 日野林俊彦 1994 初潮と女性性の受容の関わりについて 日本心理学会第58回大会発表論文集 325.
 伊藤裕子 1978 性別役割の評価に関する研究 教育心理学研究 26(1) 1-11.

- 斉藤誠一 1987 思春期における身体意識について 上越教育大学研究紀要 6(1) 79-92.
- 斉藤誠一 1993 青年期におけるボディ・イメージの特質と関連要因の検討 神戸大学教育学部研究集録 90 245-251.
- 佐藤公代・寺川夫央 1995 青年期女子における身体像に関する研究—身体満足度と視覚的体型認知の観点から— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 42(1) 41-52.
- 佐藤公代・赤澤淳子・寺川夫央 1996 青年期における身体満足度と性別役割意識との関係について—性差および身体満足度の観点から— 愛媛大学教育実践研究指導センター紀要 14 69-77.
- 佐藤公代・赤澤淳子・寺川夫央 1997a 青年後期男女における自己の身体イメージと性の受容のあり方との関連 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 43(2) 97-109.
- 佐藤公代・赤澤淳子・寺川夫央 1997b 中学生における身体像について—性および学年による身体満足度と関心度の検討— 愛媛大学教育実践研究指導センター紀要 15 79-96.
- Secord, P. F. & Jourard, S. M. 1953 The appraisal of body-cathexis: Body-cathexis and the self. *Journal of Consulting Psychology* 17 343-347.
- 柴田利男 1987 青年期の身体評価にみられる性差と社会的不安に及ぼす影響 日本心理学会第51回大会発表論文集 533.
- 高里美智子 1994 青年期女子におけるボディ・イメージと性の受容 日本教育心理学会第36回総会発表論文集 91.
- 山口素子 1985 男性性・女性性の2側面についての検討 心理学研究 56 215-221.
- 山口素子 1989 SD法による身体イメージの測定 心理臨床研究 6 50-59.

付 記

1. 本論文におけるデータは、1996年愛媛大学大学院教育学研究科修士論文において収集したものを一部修正したもので、佐藤ら(1996, 1997b)の論文にて用いたデータと一部重複する。
2. 調査を実施するにあたり、ご協力いただきました先生方ならびに生徒、学生の皆様に心より感謝致します。